

弘前藩の学風

羽賀 与七郎

一 学校の創設とその変遷

寛政八年（一七九六）六月に創設された弘前藩の藩校では詠は教科目として経学・兵学・天文算学・紀伝学・法律・諸礼・書学があり、主として御目見以上の子弟は所定の年令に達すれば入学する定めであった。これと平行して従来城中にある評定所で行われていた儒学・兵学の講筵を今年八月から学校に移し、二・七の日は儒学、四・九の日は兵学と定めたのである。武道教育は寛政十年（一七九八）正月より行われた。その理由は学校道場が前年の末に完成したためであつて、特別な意味がなかつた。また御目見以下の子弟であつても学校の道場での稽古は許された。医学教育も寛政八年九

月から評定所で行われ、全十年九月に学校で行うことになった。

右に述べたように文・武・医の三分野にわたる雄大な教育施設を具備した弘前藩も藩士土着の制庶の失敗と次第に迫る北方問題の進展に直面して藩校の規模縮小を余儀なくせざるを得ない事態となつた。

寛政九年（一七九七）十一月以降五〇〇人余りの軍兵を箱館に派遣し、全十一年正月東蝦夷地が七ヶ年に限り、上知され、十一月になるや箱館警衛を免ぜられて浦川の警衛を命ぜられ、全十二年四月砂原・クマリの勤番所に派兵し、年々交替したが、この年より惣五〇〇人余りのところ三〇〇人と減食されたが、その経費は藩財政を圧迫したこと

とは勿論であらう。

寛政四年（一七二二）八月に発行された藩士の土着制は、全十年（一七二二）五月藩当局がその非を認めて、廃棄され、在宅の引上げが完了して諸勤が常態になったのは享和元年（一八一八）十二月八日からであった。

松前派兵と藩士の弘前への引上げの費用は藩蔵政の重圧となり、寛政十一年（一七九七）五月儉約令が発せられた。従来等官の俸給を除いて学校経費定額は年三十石のところ、五月廿日以来五百石と定められ、萩も寛政九年、全十年に春秋二回、全十一年二月に行われたが、以求年一回学校限りで行うことに定めて藩士の拜觀をも取り止めたのである。八月十五日学校道場は廃止となって、各師家に拂下して武道教育は師範家の道場で行われることになった。八月廿七日学校も閉塞して完了した。

寛政五年（一七九三）六月松前城下において露使ラクスマンに与えた約束によって露使レサコフが文化元年（一八一八）九月長崎に来航して、わが国との

交易を求めたが、幕府はこれを断つたその報復的行動といわれる文化三年（一八一六）九月から翌四年五月にわたった露人の北方騷擾のため四年五月増派兵あり、従来とて蝦夷地派兵には多額の経費を要したが、今回の増派兵のために出兵費用は巨大となって藩蔵政は困窮し、今年十一月に文化五年より全七年まで厳密儉約令を実施することに定めた。四年五月近海にも外国船が現われたため沿岸防備を厳にした。九月中川飛騨守、遠山金四郎・村上監物の三人は蝦夷地よりの帰途日本海の沿岸を巡見している。この頃藩政は武備一辺倒となつた。文化五年（一八一八）十二月十八日藩主等親（一七六五）は西蝦夷地警衛を永く命ぜられ、高十万石と高直りとなり、四品に叙せられた。

文化五年二月二日学校は当分廃止し、規模を縮小して三の丸にある屋形を修理して学問所とし、教科目は経学・数学・書学とし兵学・医学等は除く旨を発表した。これと同時に三の丸座敷において、二の日備書、七の日兵書の講読を定めたが、これは従来回数半分の半分である。

この年十月八日三の丸屋形の補修作業は進行して學向所も完成、本日移転し、十日よりこゝで授業が行われた。学校は學向所と改称され規模も縮小されるが、従つて学官人算数も減少するのも当然であるが、文化十四年（七八）十一月現在の転員は次の通りである。

転名	氏名	年令	任命時
統司	喜多村源八	卅一	文化十年九月
小司	成田六左衛門	五十六	文化五年二月
釋羊之頭	神 嘉門	五〇	〃
全	舊西健司	三七	文化十年五月
全	黑澤彰助	三六	文化八年十月
書学名頭	一町田石作	三六	文化七年三月
数学名頭	中田勇藏	五四	寛政八年正月
全	竹内良藏	二九	文化九年七月
学校目付	斎藤熊之進	三六	文化十三年四月
全	伊東小太郎	四五	享和三年三月
全	十葉市郎	五八	文化五年十月
經学添筆頭	石岡金藏	四二	文化六年十月
全	金范太一	三一	文化十年十月

全	長崎慶助	三〇	文化十年二月
經学添筆頭	築館慶次郎	三二	文化七年三月
数学添筆頭	福士連藏	三六	文化五年二月
勘定方	工藤榮治	四七	文化十年二月
全	平岡忠左衛門	四六	文化十三年八月
物書	山内運次郎	三七	文化十三年八月
和学	乳井莊左衛門	三二	文化十四年正月
經学典司	黒澤慶太	三二	文化二年八月
全	花田竜兵衛	二八	文化八年六月
全	三浦常作	二八	文化七年一月
全	伊藤熊四郎	二六	文化八年四月
全	工藤忠司	二七	文化十年十月
全	橋本平次郎	二四	文化十年三月
全	毛内房之進	二四	文化十年三月
全	油布秀五郎	二三	文化十三年四月
書学典筆	岡本茂吉	三三	文化元年三月
全	相馬伊三郎	二七	文化九年十二月
全	高西鉄三郎	廿三	文化十二年三月
全	花田直司	二〇	文化十三年三月
全	外崎栄吉	二五	文化十三年六月

数学教授 工藤巴流司 二六 文化九年五月

全 下山忠橘 二四 文化十二年三月

取次役部番 三浦忠藏 三五 寛政十年一月

全 福士善弥 三二 文化八年二月

全 斎藤源吉 三〇 文化四年九月

全 小山藤太郎 二六 文化八年十月

右に掲げ五表中に如字もあるが、文化十四年に新
らたに設けられたものである。この職制は幕末ま
で殆んど変りなく、たゞ安政六年（五一八）二月廿
八日蘭学堂が増設され蘭字が字問所で組織的に教
授されることに注目されよう。

註

(一)『日本教育史資料』巻三百七。六一七二三

宇野哲人外著『藩学史談』頁三八五―三九八

『青森県史』第二巻頁五九七―六〇五

青森県史蹟名勝天然記念物調査会『史蹟名勝

天然記念物調査報告』第一輯大正十三年三月

『果正殿「津軽藩の武士帰農策」』（全氏『封建

社会の統制と闘争』所収）

出稿「徳古館成立に關する一考察」、『弘前国

中研究』第十八号）

(3)松前問題のその後の経過については高倉新一

郎『蝦夷地』、元本省吾『北方渡来』、丸山

国雄『日本北方發展史』また近く刊行予定の

『弘前市史』上巻（藩政編）を見られたい

(4)弘前藩の幕末における教育の詳細について前

記『弘前市史』上巻（藩政編）を見られたい

(二)御出入儒者三禮準蔵と佐藤捨藏

江戸平所二つ目にある上屋敷に寛政九年（一七

一十一月）学館が設置され、弘道館と称した。教科

目は経学・諸芸・書道・算術・武道・医学であつ

た。組織体制は大司・小司・司監・司読・全補・

校勘・司賓・伝者等であり、入学資格として、藩

士は勿論のこと嫡子、二三男であつた。江戸邸詰

の人数は少なく、その上學勤のため出席率は極め

て悪く、そのため文化二年（一七八）九月六日休

業し、以来生徒の姓名を廃止した。しかし武芸稽

古所はそのまゝ存置され、家中子弟の素読は別途に

経緯され、塾料二人扶持の指導者三人が任命され

た。九月十二日よりこの日に御座儒者三繩準蔵（一七五六一）が上屋敷において講書した。彼の名は惟國、字は溫卿、薄山と号し、又は桂林館と号した。而して、會に住居していた。彼は安達修の内で、安達は那部南郭の門である。従つて三繩は英國芋派の南郭系と見られる。享和元年（一八一）九月五日上屋敷に於いてはじめて藩主寧親に御目見し、九月十二日より學館弘道館に於いて、二の目見し、七の目見し、四の目見し、國東會舘と講書を定めて講書し、また侍講をも勤めた。文化元年（一八一）五月御出入十人扶持を賜わったが、文化五年正月現類もなく老人賊の料束の生活を當局に頼つて病死した。當局は彼のハケ年における諸書の精勤を賞めて三人扶持を娘に与えて生活を保証した。三繩の病死後、上屋敷に出入する儒者は佐藤一斎（一七五九）である。一斎は名は坦、字は大進、始めに信行と名付け、幾久蔵と称したが甘一才のとき捨蔵と称した。一斎・愛日樓・老吾軒と号した。文化二年（一八一）十月林述斎の塾長となり、これより門人も増し、講書の日には罷

くもの堂に溢れたといふ。一斎の名が藩日記にはじめて現われるのは江戸日記文化五年十二月十一日の条で（ハ）吳筆者）

一御書役申出候。林大學頭様學頭佐藤捨蔵江蔵喜為御祝儀、銀壹枚被下方、伺之通。

右のように捨蔵の名で書かれている。この頃弘前藩と一斎との關係が生じたものと思われる。

文化六年（一八一）正月常府の近習小姓戸沢養太郎が、九龍を命ぜられた。それと同時に江戸郎にする書籍全部の管理を命ぜられたが、全八年四月十八日病死した。彼の祖父は八代信明の守役を勤めた松永芋派の儒臣戸沢半左衛門惟興である。

この年二月御中小姓相坂恒太郎は江戸勤學登りを命ぜられ、小司葛西善太と同道して三月末に江戸に登り、五月林大學頭（述斎）に入内した。かくして弘前藩と林家塾長である一斎との關係が深まつて来たのである。十二月十二日一斎は上屋敷に招かれて論語を講じた。

葛西は江戸において国元の學向所の學風改めを命ぜられたため、それに必要な書籍を購入し、十

月廿三日歸弘した。恐らく一斎の指導を受けたものと思われ、十二月廿八日葛西は教授方の問合せと必要書籍の購入等の精勵を賞せられ銀五枚を賜わった。

註

(1) 拙稿「弘前藩医桐山正哲」(『日本正史』第九七号)

(2) 西島醒『儒林源流』によれば「文化五年正月二十八日歿年六十五」であるが、江戸日記文化五年三月十二日の条に記載された彼の正月廿九日附願書によれば「当辰五十三歳三罷内娘壹人御座候而外に親類一人も無御座候間」と五十三才で病死した。彼の生歿年は江戸日記によった。

(3) 江戸諸家人名録「文化十二年九月」

(4) 前掲『儒林源流』頁一七四

(5) 江戸日記文化五年三月十二日の条

(6) 松村操『続近世先哲叢談』下・

山田準『大塩中斎・佐藤一斎』・

高瀬代次郎『佐藤一斎と其門人』

(7) 戸沢家由緒書

(8) 相坂は享和三年八月御中小姓となり経々添学頭に任命され、文化五年二月一添学頭を免ぜられて学問所御用懸となり、文化八年十月病死した。

(9) 江戸日記文化六年五月廿一日の条

(10) 全 十二月十二日の条

(11) 御国日記文化六年十月七日の条

(12) 全 十二月廿八日の条

(三) 学風の變更

文化七年(一一八)正月十六日学問所の学風を變更する旨を発表した。

御国元学問之儀ハ、前々宋学御用得、御代々共被遊御尊崇候義ニ付、学問所学風片前々之通、宋学ニ相改候様ニ今更被仰付候。殊ニ近年松前御用ニ而、莫太之御物入ニ付、格別御省略被仰付、諸事御見合之御場合ニ候得共、学問所之儀ハ必竟厚恩召ニ而、被御立置、御家中年々専ら教導被仰付候間、一統難有奉存、其齡拾五歳迄之親並并嫡子之分ハ何れも入学

我候様ニ、二男三男共可成丈、入学致^セ候様。
尚又拾六歳以上之親並^ニ嫡子二男三男共、志
有^ニ之面々ハ入^ル学之上、道芸相^ニ学候様ニ被^レ仰付
候。其外耳長之族者、勤仕之暇、学問所講^ニ款、
又者会談^ニ江罷出候様被^レ仰付候。此旨可被^レ申^ル候。
己上

文化七年正月十六日 御調

右に掲げ左觸文の前半に重大な意味がある。即^チ考
問所の学風を程朱^ニに改めるといふのである。従
来藩校稽古館における儒学は如何なる学派であ
らうか。この問題を解明するため藩校創設以前
にさかのぼって考えて見ることにしよう。

四代信政は儒学を程朱^ニの^二人見友元^一（一六八
九）に学んだ。人見は名は簡、字は宣卿、友元
と称し、竹洞または鶴山と号した。京都の人で羅
山の門にして寛文五年（一六六五）幕府の儒官に仕せ
られた。信政の招聘した儒臣に小見山玄益、小泉
由己、砂川惣左衛門、桐山正哲がある。その属す
る学派は何れであるか今は明らかにし得ないが、
恐らく程朱学派であろうか。彼等の活動について

は今省く。信政は延宝八年（一六九〇）九月に山鹿
流兵法の奥秘である大星伝を山鹿素行（一六八五
—）より授けられている。山鹿流兵法は経学を含
み、道徳、政治を基調とする兵学即ち武教を成立
せしめた。素行の経学は、始めは程朱で、のちに
古学（聖学）を基調とした。程朱学より古学への
転向は寛文三年（一六六三）であつて、寛文五年（一六
六五）に『聖教要録』を刊行して古学の主張を公に
した。このことは日本儒学史上特記すべきもので、
また北条流兵学から離れて山鹿流兵学を確立した
ことも兵学史上より重視されるべきであらう。彼の
晩年の著書に『原源発機』三巻、『原源発機諺解』
三巻（岩波書店『山鹿素行全集』第十四巻收）
がある。前者の巻下は延宝六年（一七二八）九月、後
者の上巻は天和二年（一六八二）二月、中巻は全年正
月、下巻は全年二月に信政は筆写した。従つてそ
れ以前に書かれたものである。この書は素行
が晩年における円熟せる自己の学問思想の根元を
示したものであり、思想的方面は易・中庸に基ず
き、経綸の大策はこれを大学にとり、その意味は

高遠であつて、哲學の領域において日本思想の原理を確立しようとした。かゝる哲學書を理解しようとする信政の教養を高く評價すべきであらう。また史実に基き日本の優秀性を述べた素行の著『中朝事蹟』が延宝九年（一六八九年）に弘前藩より刊行されている。

素行と弘前藩との關係は詳細に研究されているので、こゝでは省くが、信政時代より弘前藩の兵學は山鹿流一色となり、これが幕末まで及ぶのである。デキストはいふまでもなく、『武教全書』、『兵法雄鑑』であつた。そのため経學として古學が藩内に流行したことは当然であらう。

六代信著時代の享保十七年（一七三七年）三月儒者五井藤九郎純禎（一六九七年—一七六二年）を招聘した。病氣を理由として元文五年（一七四〇年）五月弘前藩を辞したが、約九十年の同講筈を聞いてゐる。彼は程朱學を主としたが、よく他學派の説をも研究しようとする自由研究の精神が現れた。『非物篇』を著わして徂徠學を攻撃したことは有名である。彼は弘前藩を離れて大坂の懷徳書院に歸り、二君に仕

えず、以来同所に起居して講説し、同書院の発展に貢献した。

七代信寧時代の宝暦五年（一七五五年）十二月乳井市郎左衛門（一七二一年—一七八二年）が登用されて元司役となり、財政再建のため種々の方策を実施し、一時は成功し、今六年七月信寧より賞の名を賜わつた程であつたが、今八年三月施策の破綻により退役した。安永七年（一七八七年）九月六十七才のとき再び筆頭勘定奉行に任ぜられたが重ねて失敗し、今九年六月川原平に宰居した。天明四年（一八二四年）九月許され、十一月生涯五人扶持を賜わり、弘前に南居してその一生を終つた。學者として乳井の學統が如何なるものであるかまだ闡明されていない。しかし『乳井遺集』に收められてゐる彼の著書によれば多方面にわたつて興味を有し、しかもかなり深く研究してゐる。彼は當時の學向、ことに宋學に対して不満を有し、著しく古學的傾向を帯びてゐることば指摘されるのである。すでに述べたように弘前藩は兵學として山鹿流を採用し、従つて藩士には古學派の經學思想をもつものが多く、かゝる

環境に生長した彼にその影響がなかったとはい
切れないであろう。その著『志学幼辨』巻之七
に乳井實全集の第一巻頁二六七一三一〇に

「²⁶⁷熱口先聖没後三千余歳、固ヨ親ルニ

聖人ヲ知ル者異朝ニハ孟子莊子ノ両子ノミ、
吾々朝ニハ素行子徂徠子太宰純ノ三子ノミ
とあつて、彼は山鹿素行ノ古学、また救世徂徠
(一六六六)と兄弟子太宰春臺(一七四七)の
護園学派の思想に共鳴している。徂徠は文芸第一
主義をとり、教育上は自由主義、啓蒙主義をとり、
実学即ち政治・経済・法律・兵学等曰常生活に支
渉の深い実学的方面を重じた。武士階級の窮乏救
済政策の根本は兵農一致の初期封建体制である武
士の土着を主張したが、しかし具体的にその方策
の実現可能については述べていない。徂徠の歿後、
護園学派の中堅となつて、この学派の発展に功の
あつた人け、詩文は服部南郭(一七五九)、経
学は太宰春臺である。春臺は武士階級の窮乏救済
の当面の政策として商業藩営論を表面に打出して

いる。

宝暦五年(一七五五)は元禄八年(一六九六)以来の大
凶であつて、乳井は財政建直しのため登用された
が、今六年九月郡中貸借を無差別とし、他領より
の借金は藩当局で責任を持つことにし、同月御用
達町人足羽長十郎を廻郷せしめて、商家は一家業
とする制を採るなど春臺等の出張を汲む政策を実
施したことは注目に値する。

儒者戸沢半左衛門(一七七一)は七代信寧時代
の寛延三年(一七六〇)六月近習詰として召抱えられ、
持誨をも勤め、明和四年(一七七六)五月世嗣信明
(一七九一)の守役を命ぜられたが、今八年(一七
七)七月守役を辞し、九月隱居し、家督を元吉
(一七八九)に譲つた。元吉も信明の側役として
献策することが多かった。半左衛門父子は程朱学
派であつた。乳井は半左衛門を依け、御用達町人
足羽長十郎を重用し、足羽をして自宅において講
書を命じたこともある。

戸沢半左衛門は安永二年(一七八七)正月病死した

が、全四年（一七五）十月廿二日より信明は松江藩の儒臣寺佐美恵助（一七六）に学んだ。寺佐美恵助は寺恵、字は子廻、恵助と称し、瀟水と号した。彼主信徳晚年の養子で、但徕門の七才子の一人で、師の遺著を整理して刊行せる功績においては徕門だゞ一人の高弟であり、但徕の二代目金谷を助けて、斯等の發展に貢献のあつた人である。彼は安永五年（一七八）八月病死するや、その門人本田苗之助に詩文を学んでいる。本田は名は寺輔、字は文輔、宛州と号し、当時浪人であつた。安永五年正月十五日信明の着具初の日であつた。彼の幼名は、はじめ熊五郎のち松五郎と改めている。この日実名を信明とし、字は安卿、合浦と号したが、信明の名は寺佐美が「左伝」によつて採進したものである。

山鹿流兵学一色の弘前藩に護国学派の寺佐美等の藩邸出入は復古学派的思想を藩士の間にさらに深く浸潤させたものと思われ、これについて節を改めて述べる。

註

①『朧月集』

②『信政公御意聞伝集』

③大江文城『本邦儒学史論攷』頁五二五

④詳しくは拙稿「津軽信政とその文教」（『前』）

大國史研究四二五号）を参照せられたい。

⑤『山鹿素行』頁一八四—一八七

⑥『支那省史料館に何れも蔵せられてゐる。

⑦『徳川公継宗七十年祝賀記念』近世日本の儒学

頁三七—三七三・堀勇雄『山鹿素行』頁

二八七—二九五

⑧森林助『山鹿素行と津軽信政』頁一四二

延宝九年六月十九日

夕津輕監物末。中朝事交代行成而、持参拾

部。（句兵筆者）

とある。津輕監物（一六五）は素行の二
世鶴の夫で、天和二年（一六六）正月家老とな
つたが、全年六月病死した。

⑨前掲書『山鹿素行と津軽信政』・『山鹿素行』

(10) 拙稿「五井蘭洲と山崎蘭洲」(『日本証史』
第一六六号)

(11) 凡山眞男「日本政治思想史研究」頁一四二

(12) 拙稿「乳井貢とその嫡子について」(『陸奥史

談』第廿六輯、第廿七輯)

(13) 野村善太郎「乳井貢」(全氏『徳川時代の経

済思想』所収) 宮本直澄「乳井貢の経済思

想について」(『弘前国史研究』第廿四号)

・大川哲夫「津軽藩に於ける宝暦改革の一考

察」(『弘前国史研究』第三〇号)

(14) 土屋高雄「日本経済思想」(『東洋思想講座

』第三卷所収)

(15) 戸沢家由緒書・『津軽藩旧記伝類』(両方の

く収書第五集)

(16) 石全

(17) 下沢内雲「乳井貢建福」(『津軽藩人物略伝

』所収)

(18) 無起記

(19) 大日本文庫『先哲叢談』儒教篇頁二七四

岩橋連成「徂徠研究」頁四八三—四八七・頁
五二七

(20) 無起記

(21) 石全

(四) 藩士の土着

天明二年(一八一七)に津軽領は半作、翌三年は皆
無作で、全四年も皆無作に近く、全五年も大凶、
全六年にいたり、普通作となつてゐる。天明三年
より翌四年六月までの死亡者総数は八一、七〇二
人で、うち弘前は四、四九六人で、当時領内の人
口は廿五万人と推定されるので、総人口の三分の
一が死亡したことになり、惨といわねはならない。
また四年八月の調査によれば、水田荒廃一三、九
九七町五畝廿五歩、畑地の荒廃六、九三一町八反
五畝廿四歩で、全耕地の二分の一が荒廃している。
藩当局の当面の施策は領民の救恤と荒廢地の復興
が睥目の急務でなくてはならない。

七代信寧(一七三九—一七八四)は天明四年閏正月二日

江戸郎において急死し、八代信明（一七六一—一七九一）は廿一才で、今年二月廿日襲封し、今年八月廿日初八回した。

も内有右衛門宣元は藩政改革のため藩士の土着制を實施すべきを九月三日に進言し、その後もしはしは信明と懇談した。俾りも内の及でなかつた。

「御入部の頃より御国御家中の内、頻に土着の政要也と在宅を被仰出度、手を替品を替へ御勧め申上げれども、高岡様御蓮慮を以、累年に漸々不殘、弘前へ住居被仰付候事、何も又在宅せしむべきかと、かたく被仰出候かともも内有右衛門并一兩人頻に再訴申上に、在宅ハ重き御義一切難被仰付事に思召候得共、再三の申出、思召には不被為叶候事なから、

此者共才ハ願ニ付三年在宅被仰付となり、天下皆御膝元ニ居勤なる事、神祖よりの御政、万民世の御世治と御意也。其後色々願ものもありけれとも一切不被仰付なりし（「無超記」）

右に掲げた資料によつても藩士の中には土着の制を實行するものが多かつたことがわかる。

兵農分離として家臣団の城下町集中、有力商人の城下町居住、また城地は領内の中心地に設定することは近世城下町の形成発達の特性であるが、信明も意を決し、ついに天明四年（一八一四）十二月希望する藩士に在宅を許したが、しかし藩費の補助はしなかつた。天明三年の大火に際し離散した農民もその後月を追つて帰村し、また荒地も寛政二年（一七九〇）までに略復興した。今年十月には下級藩士の在宅を奨励したが、自力で農耕に従事することを條件にしている。その理由は在宅するが、直接耕作せずして関係百姓の手によつて生産に従事すれば反つて百姓の耕作の妨害となるからである。

寛政三年（一七九一）四月戸数人別諸職諸家業改めが命ぜられ、五月よりその調製が開始され、九代寧親（一七六五—一八三三）時代の寛政大年（一七九四）十一月に完成を見た。この戸籍は藩政の事典であり、

さる天明の大凶によつて領民の大量死亡と領外離散を招来したが、その救恤も寛政二年にいたり一庀平靜になり藩当局も生産階級の実体を精細に把握して本格的政策を実施し得る状態になったことを意味するのである。事実寛政元年より綱紀の南正と風俗の矯を行い、二年より翌三年にわたつてしきりに人物の登用を行つたが、その主なものを掲げると

寛政二年六月 牧野左次郎

用人

三年正月 竹内長左衛門

郡奉行手伝

大道寺隼人⁽¹⁰⁾

用人兼役

赤石安右衛門⁽¹¹⁾

郡奉行兼勘定奉行

菊地寛司⁽¹²⁾

全

二月 楠美莊司

勘定奉行

工藤甚之助

御筆口役兼勘定奉行

藤田小三郎

全

成田祐右衛門

勘定奉行

五月 楊庭半兵衛

用人

棟方角之丞

大目付

。三橋勘之丞

御筆口役兼勘定奉行

田中宗石衛門

山奉行

笹 要人

山奉行兼

であるが、。印の人物を七人衆と称し、財政改革の推進力であつた。牧野が用人に登用されるや、その友人である赤石と菊地の二人は彼の善政を願つて、田位の再検・借財の整理・藩士の土着・林政の改善の四ヶ条の施策を牧野に示した。この友情に感じて牧野は兩人を推挙して勘定奉行兼郡奉行に登用したと伝えられている⁽¹³⁾。右のヶ条の中藩士の土着を除き残りの三ヶ条は信明に採用されて推進されるが、彼は寛政三年（一七九一）六月廿三日歳世才にして江戸で病死した。牧野・赤石・菊地の三人による寛政の改革はそのまゝ、九代寧親の時代に推進されるのである。

九代寧親（一七六五—一八三三）は信明の末期養子として寛政三年七月五日令知黒石侯より宗家を継いだ。翌四年八月廿一日藩士の土着制を採用し、近侍のもの、。幕府にあるものを除いて禄二百石以下の

藩士に對して全賃在宅を強制した。土着制の採否について藩主・臈部の間に爭論あり、家老大道寺尊人・用人・牧野左次郎・勘定奉行赤石安右衛門・全菊地寛司等の改革派の主張が通つたのである。この令が下るやさきに述べた毛内有石衛門一家等が卒先して在宅した。しかし大方の藩士はこれに応ぜず、そのため寛政五年（一七九三）九月十八日大目付頼をもつてさらに嚴重令した。在方に引越の開始されたのは今年秋であり、完了は寛政七年（一七九五）三月頃のものである。勤番の關係上弘前周辺の村に在宅した藩士が多かつた。土着制に基く種々の法令があるが、今は省く。しかし寛政十年（一七九八）五月廿七日この制度は廃止され、在宅の引上げが完了して諸勤が常態に復したのは享和元年（一八一八）十二月八日であることは第一で述べた通りである。

熊沢藩山（一六六一）は兵農一致即ち農兵制度の昔に歸るべしと説いた。これは武士階級の経済的困難の打開策の一つとして土着制を主張した

ものである。しかし彼の仕えた岡山藩においても實現せず、その後江戸中期の経済思想家荻生徂徠（一七二六—一八〇一）も武士階級の窮乏救済策の根本は兵農一致の古に復すべしと主張した。しかし藩士の全般的な土着制は経済思想としては存在した。その実施の例は未だ暫てなかつた。しかるに寛政時においてわが藩にその例を見るが、しかし失敗の例である。牧野は山鹿流の兵学師範であり、毛内をはじめ赤石、菊地のように土着論を主張するものが多かつた。ときあたかも天明の大凶による荒地の復興という主要な目的があつたにせよ弘前藩の藩士の本流には復古的思想が根強く存在していたことを示すものであらう。

土地経済より貨幣経済に移行しつつあつた江戸時代の後期において、土着の制は時代に逆行するものであつて、¹⁾ 封内事実の著者はこれを評して「一説御家中土着の儀は富国強兵の基なりと徂徠、²⁾ 政談³⁾ など偏に信じて時勢人情を辨えざる儒生の僻見より出たる事にて勘定奉行伴才助の

徒の趣意なりとも申候由」と述べている。

註

(1) 御国日記天明四年六月廿日の条

(2) 拙稿「鎌古館成立に關する一考察」(『大分県史研究』第十八号)

(3) 信明の人物、政治等については『無超記』・

外崎寛『津輕信明公』等に詳しい。

(4) 『津輕藩旧記佐頼』(『又ちのく双書第五集』)

頁二二二—二二三

宣元は宝曆八年(一七八七)七月三百石の家督を

継ぎ、その後足輕頭となつたが、天明二年(一八二二)

四月病氣と称して隠居し、その子有右衛門、

茂幹に譲り、当時悠々自適の身であり、寛政

四年(一八二二)八月藩士の土着の令が下るや卒

先して増館組水木村に居を移し、その屈を學

長館と称した。国等・和歌に通じ、菅江真澄

や歌人良寛の弟である越後の出雲崎の神官橋

由之(一七八三—一八三二)等を食客として和学を講

究した。

(5) 御国日記天明四年十二月廿八日の条

(6) 『無超記』

(7) 御国日記寛政二年十月一日の条

(8) 拙稿「鎌古館成立に關する一考察」(『大分県史研究』第十八号)

国史研究『第一八号』

(9) 牧野左次郎恒貞は七代信寧時代の宝曆十二年

(一七八七)七月家督五百石を賜わり、安永六年

(一八二二)山鹿流兵堂師範となり、八代信明時

代の寛政元年(一八二二)正月御持鐘奉行より御

小姓組頭兼となり、全二年六月三日御用人、

九代寧親時代の寛政六年(一八二四)九月十五日

家老転となり学向所御用掛となり、全十年五

月九日家老を免ぜられ、九月四日藝習を命ぜ

られ、享和三年(一八一三)三月十四日死去。牧

野伴右衛門恒隆は山鹿素行の門人で、四代信

寧時代の貞享元年(一六八四)に信政に召出され、

その後養進して大目付となり、元禄九年(一六九

六)御国住居となつた。左次郎はその四代目

である。

(10)大蓮寺集人繁殖(一七七五八一)は七代信寧時代の安永元年(一七七)八月廿三日家督七五。石を賜わり、正月十一日御馬廻組頭、天明三年(一八一)御役御免となり慎を命ぜられ、八代信明時代の寛政三年(一七九)正月十五日御寺廻組頭より用人兼となり、九代寧親時代の全年九月廿七日家老殿となり、十月朔日將軍に諫す。全十年(一八一)六月十九日江戸にて病死。

(11)赤石安右衛門行達(一七四五一)は八代信明時代の寛政三年(一七九)正月廿八日作事奉行より郡奉行兼勘定奉行となり、寛政十年(一七八)用人となり、全年五月廿三日知行召上げられ、蟄居を命ぜられた。

(12)兩地寛司正礼(一七八一一)は七代信寧時代の明和六年(一七六)二月一日家督高五十石を賜わり、八代信明時代の天明四年(一八四)十月十五日御寺廻格郡奉行手伝となったが、全年十二月十六日無嗣法あつて御目見以上御田

守居支配と役下けとなり、寛政三年(一七九)勘定奉行兼郡奉行となり、同日晦日米方取扱を担当した。全八年(一七八)六月十五日御持簡足輕格となつたが、全十年五月廿三日無嗣法のため、知行召上げられ、蟄居を命ぜられた。文化三年(一八六)十二月廿二日蟄居を許され、文政四年(一八一)正月廿四日死去した。

(13)『津輕藩旧記伝類』(及びのく双書第五集)頁二七四―二五八

(14)御国日記寛政五年九月十八日の条

(15)『藤田家記』

(16)『御家中在宅之族村寄』寛政七年三月

(17)御国日記寛政十年五月廿七日条

(18)全年五月廿三日家老牧野左次郎、全廿四日用人赤石安右衛門、勘定奉行兩地寛司は夫々御役御免となつた。

(19)本庄栄治郎『江戸、明治時代の経済学者』頁三八

(20)伴才助建尹は八代信明時代の寛政二年(一七九)

四月一日家督高百石賜わり、全年九月十五

日近習小姓、九代寧親時代寛政四年（一七

）正月十五日御録口役兼勘定奉行となり、

全六年（一七四七）十一月十五日勘定奉行兼御

録口役となつた。全七年（一七八七）六月物頭

格等校小司兼勘定奉行、全十一年二月一日

勘定奉行兼役を免ぜられ、全十二年十二月

十五日等校惣司となり、享和二年（一八一

）六月十一日兼御録奉行となり、全三年十一

月一日病死した。（『由緒書』）勘定奉行

勤務中は菊池、赤石等は彼を和漢経済の導

引としたと伝えられ、惣司となるべき等校に

おいて古学の行わるゝを嘆き、程朱等に反

革せんとして家老大道寺隼人と議論したと

も伝えられている。（『津輕藩旧記伝類』）

伴は林家入門の儒者であり、また山崎圖書

の門人でもあるので徂徠等派とは思われな

い。土着制の主謀者は伴であるとの噂さは

単なる噂さに過ぎないだろうと思われる。

（五）のついでには幕（五）で述べる。

（五）等校の学風

儒者戸沢に続く儒者は山崎圖（一七七一）で

ある。諱は道仲、字は仲漢、圖書と称し、蘭洲と

号した。はじめ嘉内と称し、のち常助（『文政』）

最後に圖書と称した。飯塚蘭洲として天下に知ら

れている。飯塚は山崎の本姓であるからであつて、

弘前藩の文教を語るには忘ることの出来ない儒者

である。宝暦七年（一七五七）三月より二、七の日に

評定所にて講書した。しかしこれは戸沢の不在中

の爲であつたが、明和二年（一七六五）二月より山崎

は弘前藩に一人の儒者として講書を担当した。

山崎の修学を見るに

宝暦元年より全三年まで 医学研究のため京

都・江戸遊学

宝暦七年より全九年まで 儒学研究のため京

都・江戸遊学

明和六年より安永元年まで 右に同じ、さらに

長崎、熊本まで旅
行した。

と前後三回の遊學をし、諸藩の碩學、各地の文豪と交わっている。とくに折衷學派の京都の大江資衡父子との関係は深い。この奥よりみれば山崎は程朱學派に近い折衷學派とみられる。

従来山崎が毎月二・七の日評定所において講書をしてきたが、天明三年（一八一七）十一月下旬より病氣のため中止し、全五年一月下旬より二の日は小學、七の日は左伝と定めて再開した。三月に至つて病氣が再発し、門弟の伴才助・唐牛大六が代講している。伴は明和八年（一七七六）三月江戸に登り、はじめ護國學派の隈部南郭の門人安達修に入門したが、後に林家に入門して天明元年（一八一七）四月に帰国した。唐牛大六も寛政三・四年にわたつて聖堂に入門した儒生である。

すでに述べたように寛政三年（一八一七）より八代信明の経綫がいよく軌道に乗つて走る段階に領内は安定し、教政も一段と強化される。

寛政二年（一八一七）七月一日城中の芙蓉の園において四書を講義し、以来毎月朔日の例とした。これは藩主と重臣・近侍のものに対する講書であつて、このことは信政時代にも行われていた。

寛政三年三月廿一日に、以来五の日に武家全書免許の者に対して評定所において兵書の講義を開始し、講師は貴田孫太夫・岡本兵馬・横島勝右衛門と発表し、また同所において諸組の武芸見分を三月六日・五月六日・八月六日・十一月六日と年四回実施をする併せて発表した。ついで五月七日に、評定所において九の日医書の講義をし、講師は表医主塚玄策・全伊藤春益・全北岡太本で、表医は全負出席し、また町、左医は出席自由であるとして発表した。評定所において従来の儒書の講義のほか兵書、医書の講義が行われることになった。信明はこの年六月廿二日江戸において病死して施政の結実を見ることが出来なかったが、これは九代寧親に引継がれた。この頃の落書に「九は病、二・七儒書に五兵書さて三六は弱きなりけり」と

あり、三六は三月六日の武芸見分の日であらう。
評定所における儒、兵、医の三科目の講席は拡
大強化されていよ／＼学校の創立となった。

寛政六年（一七六四）八月十一日津輕中書は用人に

任命され、担当行務の一つは学校創立に關するこ
とであつた。全月十六日山崎圖書、惠牛大六・京
良岡彈四、薄田多門・葛西十之助（善太）、工藤
民助を学校御用懸に任じた。何れも山崎門下であ
る。これより次第に学校御用懸を任命していった。

先年山崎が諸國の学校を訪問して得た資料と、ま
た一方林家に葛西善太を豊わして得た資料を基に
して学校を創設したと伝えられている。九月十一
日学校の用地を大手門の南外側に定め、十月には
創立の趣旨を發表した。その内容は藩士の子弟の
學術研究の門戸を拓けて人材を養成すること、
これは八代信明の遺志であるという。信明は学校
創設を予定していたが、當時財政の余裕なく、ま
だ急死によつて実現を見なかつたのである。寛政
七年（一七六五）正月には学校建物の造営にとりか

り、用人永孚は御用書を命ぜられて学校事務が專
門となり、七月八日入學資格等を發表した。これ
によれば入學年令に差があるが、御目見以上の子
弟は必らず入學し、以下の子弟であつてもその師
の推薦があれば入學出来た。従つて御目見以下の
子弟の多くは私塾において修學せざるを得なかつ
た。

寛政八年（一七六六）三月十五日学校の取制が定め
られ、六月廿日藩主の学校建物の視察あり、六月
廿三日医学、武芸關係を除いて學官の任命があつ
た。全月廿八日地鎮祭（開校式）、七月九日入學
式を學行した。これ以後の学校の変遷は（一）で述
べた通りであつてこゝでは繰返しては述べない。
藩校における學風は如何なる學派によつて支配
されたらうか。第三で述べた文化七年（一七八一）
正月十六日の學風改めの令によれば漢學學派であ
つたことは明らかである。

寛政八年（一七六六）六月廿三日に任命された學官
を見るに

学校御用掛

家老 牧野左次郎

学校惣司(国師)

用人 津輕永孚

小司(典成)

大目付次順 山崎図書

外 二名

経々頭(孝士)

成田定次郎・唐牛大六・藤西

千之助(善太)・工藤民助・

松田常義・薄田多門

兵々々頭(孝士) 岡本兵馬外四名

(外略)

であつて、家老牧野左次郎は第四で述べたように
藁園芋派に従う政策推進者の代表者であつて、し
かも山鹿流兵芋の師範である。用人津輕永孚は徂
徠芋を主とする人物でかつ津輕家一門で、学校惣
司である。また藩士の中には復古的思想をいだく
ものの多い当時にあつては学校の芋風は藁園芋派
的色彩の濃厚であるのは当然であらう。経々々頭
の六人は山崎門下であり、その中唐牛大六・藤西
善太は聖堂に遊学した程朱芋派であつたろうが、
その発言権等は当時極めて弱かつたものと思わ

れる。

寛政二年(一七九〇)五月廿四日老中松平定信が林

信敬大芋頭に下したいわゆる異芋の葉は程朱芋以

外、川、藁園、折衷等の諸芋派を異芋として林

家に禁止したもので、これが異芋の禁として後世

扱われるのは林家以外にも可成の影響を与えたが

りであらう。信敬は翌廿五日塾生一同に伝え、六

月一日塾外の門人に伝えた。

寛政三年(一七九一)四月老中松平定信は同役島居

忠意等と聖堂を巡見し、今年十月より工を起し、

堂・芋舎を新築し、儒官の住宅をはじめて設け、

完成したのは翌四年(一七九二)八月であつて、寛政

九年(一七九七)十二月幕府の直營とし、昌平坂学問

所と呼ぶことにし、これよりさき九年(一七九七)三

月敷地を拡張し、翌十年二月聖堂再建の統率行の

任命あつて、その後土木を起し、十一年(一七九八)

三月廟殿の建築にかゝり、芋舎の増築をも行つて

十月に全く落成した。寛政十二年(一八〇〇)種々の

学規を作り、また施設を行つたが、直参本位であ

のため、享和元年（一八一）陪臣や浪人の篤學者にまで收養する書生寮を設置してなく講書が開放された。

寛政十二年（一八〇）十二月十五日学校惣司となつた伴才助は山崎の門人で、また林家の門人でもあつた。惣司になるや学校の學風が古學であるのを嘆き、程朱の學に改めようと藩の要路の者に進言したが納められず、ついに享和三年（一八一）十一月一日病死した。

折衷學派の龜田長興鵬翁（一八七五—一八一）の門人東條弘一室（一八七五—一八一）文化元年（一八一）に招かれて弘前に來り、講書し、竟の用いざるをみて二年余りて慨然弘前を去つて再び佐を求めず駒込吉祥寺の辺に地を卜して塾を開いた。時に文化二年の督一堂年廿八才であつた。江戸邸においては文化二年（一八一）九月、三繩準藏が廃止され、引續き義園學派の三繩準藏が文化五年（一八一）正月まで講書し、今年末頃、林家の塾長である佐藤一齋と弘前藩との連絡がつかぬ、ついに翌六年末に一齋が江戸邸ではじめて論語を講義した。

葛西善太は文化六年江戸において学校學風改めの命をうけて、その準備をした。恐らく、佐藤一齋の指導をうけたと思われる。その理由はこの頃一齋と弘前藩との關係が近接しはじめていることと、また学校創設の際彼は林家に遣わされてその資料を得ていると伝えられているからである。彼は山崎圖書の門弟である許りでなく、その女婿であつて、『蘭洲先生遺稿』の巻五に收められている「蘭洲先生行狀記」の筆者は彼であつて塾堂に學んで、程朱學をもつて名があり、寛政八年六月学校創設のとき経々頭に任ぜられ、享和二年（一八一）十月一日学校小司となつた。学校惣司の伴才助の學風改めの努力も空しかったのであつたが、文化六年葛西は江戸において學風改めの命を得、ついに今七年正月より実現が出来たのである。文化八年（一八一）九月九日病死した。學風改めの推進者を見るに何れも山崎の門下生であつた。文化七年以後、佐藤一齋と弘前藩との關係はいよいよ深まり、塾生は一齋を介して昌平坂學問所に入所する。また文化七年正月の學風改めの令によつ

て完全に經朱學派に學風が改まつたかという問題も論すべきであるが紙面の都合等もあり、稿を改めてこれらのことに就いて述べたい。

本稿は學風改めと、それ以前に藩内に行われた學風のゐを述べるのが目的であつて、読者の批評を期待して終ることにする。

註

①内野峻亭『訂正近世儒林年表』全

②拙稿「五井蘭洲と山崎蘭洲」(『日本正史』

第一六六号)

③『稽古館版』蘭洲遺稿』文化二年には大江文子と支敵せる詩文多く、その序文は大江漢衡の

ものである。

④講師は全貞山鹿流兵學師範である。

⑤津輕永享編輯(一七二七)は、はじめ定吉

貞正と稱し、のち中書式部と改め、寛政六年

(一七二七)十月一日永享編輯と改めた。寛政六

年八月十一日用人となり、全八年(一七二七)六

月廿三日學校惣司、全十年(一七二九)七月十七

日家老となり、全十一年六月八日家老を免ぜ

られ傾を命ぜられ、七月八日蟄居、文化六年

(一七九八)十二月五日蟄居を許された。山崎の

門人で、聖堂に入る。その學派付徂徠を宗と

した。文化・文政の頃學識は最も円熟した。

奇英に力を用い、儒生の貧なるものにはその

資を給した。(『津輕永享事蹟』)

⑥學校創設に關する文献は第(一)の註を参照せられたい。

⑦和島芳男『昌平校と藩學』頁八六―八八

渡辺年庵『復古思想と寛政異學の葉』頁七七

―一三七

⑧前掲『昌平校と藩學』頁九七―一〇一

⑨『津輕藩日記佐類』(又ちのく)『書院三集』

頁三六六―三六七

⑩鶴田惠吉『東條一堂伝』頁廿五―廿一

なお市中に彼の遺墨を散見するが、東條の名

は藩記録について筆を以て未見である。

⑪『参考』

⑫『参考』

⑬山崎約次郎『親類書』天保五甲午年